学校通信

矢巾町立矢巾北中学校

わだち

『緑風北魂』

友愛・躍動・創造

2022．04．13

No．03

〒028-3622
矢巾町大字上矢次 7-115
TEL：019-697-1921
FAX：019-697-7526
（文責：伊藤茂美）

本校の「まなびフェスト」

本校の学校経営の方針を保護者及び地域の皆様に周知し、その取組や達成度を評価していただく「まなびフェスト」を、「５つの合言葉」をもとに今年も以下の通り定めました。２学期末には、生徒及び保護者の皆様対象のアンケートを実施しますので、取組をお願いいたします。

数値目標：令和３年度の結果をもとにした令和４年度の目標（肯定的回答の割合に変更）

※生徒は自己評価、学校と家庭は保護者評価の数値です。

1　先手必勝のあいさつ（礼儀正しい生徒）

生徒：自分から進んであいさつをし、礼儀正しい生活を心がけます。 ＜**数値目標９５％**　結果９３．６％＞
学校：あいさつの率先垂範を心がけ、校内や地域であいさつを交わす雰囲気をつくります。 ＜**数値目標９５％**　結果９３．４％＞
家庭：あいさつの率先垂範を心がけ、家庭や地域であいさつを交わす雰囲気をつくります。 ＜**数値目標９２％**　結果９０．８％＞

2　良きプレーヤーは良き生活者（日常の学習を大切にする生徒）

生徒：日常の授業や家庭学習など、目標を持った学習の取組をします。 ＜**数値目標９０％**　結果８９．２％＞
学校：家庭学習ノートの提出を通し、家庭学習の習慣化と学習方法の指導を行います。 ＜**数値目標９０％**　結果８９．３％＞
家庭：毎日机に向かう習慣をつけさせ、学校の家庭学習体制のサポートを行います。 ＜**数値目標８０％**　結果７８．４％＞

3　魂をゆさぶる表現活動（正々堂々とした生徒）

生徒：授業や行事、諸活動などでの発言や発表を相手に伝わるように行います。 ＜**数値目標８０％**　結果７８．４％＞
学校：授業や行事の取り組みを通し、発表力・表現力を身につけさせます。 ＜**数値目標９３％**　結果９１．６％＞
家庭：子どもの活動に関心を持ち、子どもの発言や発表に耳を傾けるようにします。 ＜**数値目標９９％**　結果９８．７％＞

4　心をみがく清掃（奉仕の心を持つ生徒）

生徒：清掃や奉仕活動に進んで取り組み、より良い環境づくりに心がけます。 ＜**数値目標９５％**　結果９４．２％＞
学校：清掃活動を通し、より良い生活を自らの手で実現できるように指導します。 ＜**数値目標９２％**　結果９０．８％＞
家庭：家事の手伝いなど、家庭内での責任のある役割を与え、毎日実行させます。 ＜**数値目標７２％**　結果７０．１％＞

5　「ありがとう」で広がる笑顔と思いやり（認め合い、人とのつながりを持つ生徒）

生徒：相互の感謝と認め合い・支え合いの心を持ち、より良い人間関係づくりを行います。 ＜**数値目標９８％**　結果９７．１％＞
学校：いじめや差別などの人間関係不調の未然防止・早期発見・早期対応に努めます。 ＜**数値目標８５％**　結果８２．９％＞
家庭：子どもの存在のかけがえのなさを伝え、安心・安全な社会（学校）生活を支えます。 ＜**数値目標９８％**　結果９６．１％＞

裏面の有効活用として、私が20年ほど前に連載していた新聞記事を紹介します。
当時の岩手日報の月曜版には、「職員室から」というコーナーがあり、県内の４人の教員が持ち回りで記事を書くことになっていました。当時の校長から、「良い経験になるから書いてみなさい。」と言われしぶしぶ引き受けた記憶があります。若手（？）職員として奮闘していた頃の自分が思い起こされ、今では書いて良かったと思います。これから紙面の都合の付くときに、載せたいと思います。今回は、教職２年目の失敗経験を通して、組織体としての学校を痛感した内容です。

「忘れてならぬ一言」

文化祭が終わり、学校にも平常の生活が戻ってきた。指導部関係の仕事もヤマ場を越えて、この仕事にもやっと慣れてきたように思うが慢心は禁物。慣れてきたと思うときこそ、大失敗をしてしまうのが人の常。私もそんな経験を、教師２年目に体験している。

学級経営も順調で授業も軌道に乗っていた２学期後半、学習発表会がやってきた。平日開催で、児童たちは授業をしながら自分たちの出番を待つことになっていたが、午後一番のわが学級は給食もそこそこに準備に入った。はやる気持ちの児童たちを落ち着かせ、準備万端で舞台に送り出した。発表は大成功だった。児童たちのやる気をうまくコントロールし、われながらうまくやったなと満足感に浸っていた反省会の席で、用務員さんから意外なことを言われた。

「俺たちに何か謝ることはないか。」厳しい口調だった。突然そう言われても思い当たることはなく、返答に困っている私に、もう一人の用務員さんが優しく言った。「給食の後片付け、だれがやったんだ？」。私は、はっとなって給食の片付けを思い出した。出番に遅れないように児童たちを送り出すことだけ頭にあり、給食の片付けをすっかり忘れていた。いつまでも返却されず、教室に残っていた食器類を、用務員さんたちが運んでくれたのだった。返す言葉もなく、うなだれている私に用務員さんがさらに言った。「**お前一人で教育しているんじゃないぞ**。」頭をガツンと殴られたような一言だった。

２年目とはいえ、素直な児童と協力的な保護者の皆さんに恵まれ、学級経営も順調だったあの頃。心のどこかに「もう一人前だ」という慢心があった。駆け出しの分際で、多くの先輩たちに支えられ教壇に立っていることさえ忘れかけていた。用務員さんの一言は思い上がっていた私に、学校教育が全職員の協力の上に成り立っていることを教えてくれた。忘れてはならない一言である。